

宮古伊良部集落方言の音調

衣 畑 智 秀

1. はじめに

伊良部集落は、沖縄県宮古島の宮古島の北西に位置する伊良部島にある集落の1つである。伊良部島は面積 29.06 平方キロメートル、周囲 72.4 キロメートルの島で、その北東側に池間添、前里添の2つの集落（合わせて佐良浜）があり、その南西側に伊良部、仲地、国仲、長浜、佐和田の5つの集落がある⁽¹⁾。

この北東側で話される方言と南西側で話される方言には大きな違いがあり、北東側は18世紀の後半に池間島から移住して来た人々によって作られた集落で、その方言も池間方言と強い親近性を持つ。一方南西側の集落で話される方言が当地でイラブツ [iraʋtsi]（伊良部口）として言及される伊良部方言である。しかし、その方言差は決して小さくなく、特に、佐和田、長浜、国仲集落に対して、伊良部、仲地集落の違いが大きい。その違いは特に富浜（2013）に詳しいが、代表的な音韻の相異として、前者の方言のみ成節的な歯茎側面接近音/l/を持つ（(1-a)）、前者の二重母音/au/が後者では融合した長母音/o:/として現れる（(1-b)）、後者のみ/a/に挟まれた/k/が弱化する（(1-c)）などがある。

- (1) a. 日：pl:ma（佐和田） vs pi:ma（伊良部）
 b. 竿：sau（佐和田） vs so:（伊良部）
 c. 赤：aka（佐和田） vs aha（伊良部）

富浜（2013: 832-3）の例を一部改変

この中で本稿で報告するのは、伊良部・仲地方言の中でも、特に伊良部集落で話される方言である。仲地集落は伊良部集落からの分村であり、分村後も互いに交流があり方言もよく似ているとされるが、詳しい違いについては調査が及んでいない。さらに、伊良部集落の中でも本稿では1949年生まれの比較的若い話者に絞ってその実態を報告する。より高齢の話者に対しても調査を行なっているが、音調が一定しない部分があり、さらに記述が難しくなるため、今回は触れない。よって、本稿の報告は、集落の方言というよりも、一人の方言話者への調査結果であり、「素描」と題する所以である。しかし、そこには一定のパタンが見られるため、伊良部集落方言を記述するための、基礎的なデータは提供できるものと考えている。

(2)

2. 先行研究

伊良部・仲地方言の音調に関する先行研究としては、まず、平山他 (1967) がある。平山他 (1967) は仲地方言の名詞の引用形がさまざまな音調で実現することを述べ、話者が「内観によってアクセントの型を知覚しえない」「崩壊一型のアクセント」(p. 31) であるとしている。たとえば、平山他 (1967) によると 2 拍、3 拍の名詞には次のようなさまざまな音調型が観察されるという。なお、以下、[でそこから高いピッチ (H) が見られることを、] でピッチが低く (L に) なることを表す。

(2) a. 花 : [pa]na, pa[na, [pana, pana

b. 女 : mi[du]m, mi[dum, [mi]dum, [midum, midum

ただし、もっとも自然なもの [pa]na (HL) や mi[du]m (LHL) であるとし、元は一定の型があったものが「崩壊」したものと見做されている。

平山他 (1967) は、個々の語に指定されたピッチ変動、すなわちアクセントが当該の方言にあるかないかを問題としているのに対し、永野マドセン (2013) では、仲地方言にアクセント対立がないことを前提に、句や文におけるピッチ変動が、文タイプや統語構造、焦点によってどのように実現するかを観察している。具体的には、疑問文文末の急激なピッチ下降、統語構造の違いによる音調句形成の異なり、係助詞の卓立的なイントネーションについて報告されているが、個々の文節で実現される音調が文全体にどのように反映されるかといった、音調の構成的な側面については述べられておらず、本稿ではその点を含めて伊良部集落方言の音調の記述を行いたい。この他、疑問文における義務的なピッチの下降については、衣畑 (2016) が伊良部集落方言の詳細なデータを示している。

3. 音調の記述

3.1 音素・音節・拍・文節

伊良部集落方言の音素には、次に挙げる 5 つの母音と 16 の子音が認められる。

(3) a. 母音

/i, i, u, o, a/

b. 子音

/p, b, t, d, k[k~h], g, ts[ts~tɕ], dz[dz~dz], f, s[s~ɕ], m, n, r, w, v, j/

音声的なゆれについて。歯茎音が /i/ の前で硬口蓋化するが、区別せずに音素表記する。ただし、他の母音の前での硬口蓋化は音韻的な対立を示すので、渡り音 (glide) を使って書き分ける (/sa/[sa] vs /sja/[ɕa]) こととする。/k/ は /a/ に挟まれた場合に声門摩擦音として現れる (2) が、これも区別せず /k/ で表記する。

伊良部集落方言の音節構造は次のとおりである。

(4) a. C₁C₂GV₁V₂C₃

b. C₁C₂

伊良部集落方言では、多くの宮古諸方言同様、子音が音節核になりうる。ただ、その場合

音節核になる子音は/m,n,v/のみである。母音を音節核とする音節は、最大2つの頭子音を取ることができる。その場合、C₁とC₂は同一の音素となり、C₁に立つことができるのは/ts,f,s,m,n,v/の5つである⁽³⁾。音節核となる母音は最大2つで、V₁V₂を埋めるのは、それぞれの母音の長母音⁽⁴⁾と、/i,i/を後部に持つ二重母音である。末子音として自由に現れるのは/m,n,v/で、その他の子音は、いわゆる促音のように後続の子音と同化する時、末子音に立つことができる。

以上の音節構造に、拍境界を|で示すと次のようになる。

- (5) a. C₁|C₂GV₁|V₂|C₃
 b. C₁|C₂

一音節語で拍境界の例を示す。

- (6) a. tsja|a (茶、CGVV)
 b. f|fa (子供、CCV)
 c. ka|m (神、CVC)
 d. s|sa|m (虱、CCVC)
 e. n|v (抜く、CC)
 f. v|v (西瓜、CC)

伊良部集落方言の音調は拍を元に計測され⁽⁵⁾、音調の与えられる範囲は自立語に付属語(助詞)が付いた伝統的に文節と呼ばれてきた単位になる。語には、1つの形態素からなる単純語の他に、2つ以上の形態素からできる合成語もあるが、本稿の調査はまだ単純語にしか及んでいない。助詞=nu(の)、=mai(も)を用いて、文節に音節境界と拍境界を記した例をいくつか挙げる。音節境界は拍境界でもあることに注意されたい。

- (7) a. f|fa.nu (子供の、3拍)
 b. ka|m.nu (神の、3拍)
 c. mi|i.ma|i (目も、4拍)
 d. s|sa|m.ma|i (虱も、5拍)
 e. a|a.i.ma|i (東も、5拍)

ただし、付属語が属格の助詞である場合には、後の語も含めて音調の与えられる範囲になることがある(3.3節)。

3.2 名詞の音調

音調の実現に、アクセントの型や音節構造が影響することも考慮して、2~4拍名詞の調査語彙を表1のように選んだ。語数は2拍語26、3拍語36、4拍語23になる。A類、B類、C類の区別は、琉球諸方言でアクセント型の対立が認められる場合の語の区別である。それぞれの所属語彙の判断は五十嵐(2018)によったが、対応のないものは、多良間方言を調査した松森(2010)を参考にした。なお、「不明」としたものは、どちらにも語形の対応がないものである。4拍語のB類が極端に少ないが、これは松森(2010)の語彙リストによったため、今後語数を増やす必要がある。

(4)

表1 名詞の語彙リスト

	A 類	B 類	C 類	不明
2 拍	butu(夫) tudzi(妻) dusi(友) ffa(子) tim(空) kadza(匂い) kuba(枇榔) ui(北) mai(米) paa(葉)	uja(父) fusa(草), fumu(雲) dzin(お金) tsjaa(茶) atsa(明日) nai(地震)	kami(瓶) nabi(鍋) itu(糸) pai(針) num(蚤) kuv(昆布) kui(声) im(海) boo(棒)	
3 拍	kivsi(煙) koodzi(麴) judai(涎) miitsi(三) mmtsi(六) jaatsi(八) juutsi(四) kugani(黄金) aai(東) tsugusi(膝)	umuti(表) kaam(鏡) asim(汗疹) katana(刀) taara(俵) kujum(曆) nanka(七日) uudza(鶉) avva(油) mafura(枕) namasi(膾) iikja(鱗) junaka(夜中) kaina(腕) kuvva(腓) jamatu(大和)	kaara(瓦) nasaki(情) ssam(虱) pititsi(一) garasa(鳥) jarabi(童) sooki(草笛) gadzam(蚊) ukuma(竈)	waadzi (扇)
4 拍	futaatsi(二) akaai(蟻) tsikimunu(漬物) karapai(灰) samsin(三線) panatsii(鼻血) pammai(食糧)	bikidum(男) naimunu(果物)	ssugii(白髪) utsidzara(兄弟) jurarabi(夕暮) namtsitsi(焦げ) mnatsitsi(杵) paitsitsi(刺青) situmuti(朝) akjaada(商人) amdii(網籠) kanamai(頭) nabjaara(糸瓜) makugan(ヤシガニ) dzoovtsi(門) mingami(耳瓶)	

3.2.1 2 拍名詞

2 拍名詞を助詞を付けない引用形で発話してもらうと、基本的に 1 拍目が高く 2 拍目が低い音調 (HL) で発話される。これは、琉球諸方言のアクセント型に関係なく、どの型に属する語でもそうである。

(8) A 類: [tu]dzi, [f]fa, [ti]m, [ka]dza, [ku]ba, [u]i, [ma]i, [pa]a

B 類: [u]ja, [fu]sa, [fu]mu, [dzi]n, [tsja]a, [na]i

C 類: [ka]mi, [na]bi, [i]tu, [pa]i, [nu]m, [ku]v, [ku]i, [bo]o

よって、アクセントは弁別的ではないことが分かる。この音調は、平山他 (1967) がもつ

とも自然に現れるとしたもので、今回の調査でもそのことが確認できた。ただし、例外的な音調も見られ、誘導しても HL で発音されなかった語としては、次のものがあった。

(9) bu[tu] (A 類), du[si] (A 類), a[tsa] (B 類), [im] (C 類)

しかし、これらの音調はアクセントの型によるものではないと考えられる。その根拠としては、たとえば次のように、HL で発話されるものも LH で発話されることがあり、

(10) a. [tu]dzi / tu[dzi] (A 類)

b. [u]ja / u[ja] (B 類)

c. [na]bi / na[bi] (C 類)

また例外的に見られる音調は、後ろに助詞をつけた場合、規則的に見られる音調だからである。たとえば、それぞれの語を「X=nu munu」(X のもの) というフレームに入れて発音してもらおうと、X=nu に当たる部分は以下のように実現される。

(11) LHL として実現するもの

A 類: bu[tu]nu, tu[dzi]nu, du[si]nu, ka[dza]nu, ku[ba]nu

B 類: u[ja]nu, fu[sa]nu, fu[mu]nu, a[tsa]nu

C 類: ka[mi]nu, na[bi]nu, i[tu]nu

(12) HHL として実現するもの

A 類: [ffa]nu, [tim]nu, [ui]nu, [mai]nu, [paa]nu

B 類: [dzin]nu, [tsjaa]nu, [nai]nu

C 類: [pai]nu, [num]nu, [kuv]nu, [im]nu, [kui]nu, [boo]nu

たとえば、(9) で見た bu[tu] や [im] という音調は、それぞれ (11)、(12) に見られ、そこに =nu が低く付いていることが分かる⁽⁶⁾。

さらに、(11) と (12) に見える、LHL と HHL の違いは、語頭の音節構造から予測可能である。すなわち、LHL として実現する場合は、1 拍目と 2 拍目が別の(軽)音節を成しているのに対し、HHL として実現する場合は 1 拍目と 2 拍目が 1 つの音節、すなわち重音節を成している場合である。よって、音調の違いは音節構造から説明できるので、アクセント型による音調の対立はないと言える。

さらに、名詞に 2 拍の助詞と述語を後続させた文「X=mai niin」(X もない) を発話してもらっても、音調の実現パターンは変わらない。一部例を略して、X=mai の部分を示す。

(13) LHLL として実現するもの

A 類: bu[tu]mai, tu[dzi]mai, du[si]mai, ka[dza]mai

B 類: u[ja]mai, fu[sa]mai, fu[mu]mai, a[tsa]mai

C 類: ka[mi]mai, na[bi]mai, i[tu]mai

(14) HHLL として実現するもの

A 類: [ffa]mai, [tim]mai, [ui]mai, [mai]mai, [paa]mai

B 類: [dzin]mai, [tsjaa]mai, [nai]mai

C 類: [pai]mai, [num]mai, [kuv]mai, [im]mai

これらの後に述語は [niin] として高くつき、音調パターンは変わらない⁽⁷⁾。

3.2.2 3 拍名詞

3 拍名詞にもやはりアクセント型の対立による音調の区別は認められない。3 拍名詞の引用形は、以下のように 2 拍名詞に助詞が付いた時の音調で発話されるのが普通である。

(15) LHL として実現するもの

A 類: ju[da]i, ku[ga]ni

B 類: u[mu]ti, ku[ju]m, ma[fu]ra, ju[na]ka, ja[ma]tu, a[si]m

C 類: u[ku]ma, ka[ta]na, na[sa]ki, pi[ti]tsi, ga[ra]sa, ga[dza]m

(16) HHL として実現するもの

A 類: [kiv]si, [mii]tsi, [mm]tsi, [jaa]tsi, [juu]tsi, [aa]i

B 類: [kaa]m, [taa]ra, [nan]ka, [uu]dza, [av]va, [kai]na, [kuv]va

C 類: [kaa]ra, [ssa]m

ただし、これも例外は見られ、その場合、音調は全て HHH で実現する。

(17) [koodzi (A 類), [waadzi (不明), [tsugusi (A 類), [namasi (B 類), [jarabi (C 類), [sooki (C 類)

どのような語で HHH で実現するのかはよく分からないが、語末音節の頭子音が歯茎摩擦／破擦音で、音節核が中舌母音であるものが多い。この場合、2 拍目から 3 拍目にかけて下降しにくく高いままで実現するが、LHH という音調が何らかの理由で禁止されているため⁽⁸⁾、結果的に HHH という音調で実現すると考えられる。ただし、この HHH という音調も義務的ではなく、語末が落ちる音調と交替するものも見られ、随意的であると考えられる。

(18) a. [kiv]si / [kivsi (A 類)

b. u[mu]ti / [umuti (B 類)

c. ga[ra]sa / [garasa (C 類)

3 拍名詞に 1 拍の助詞を付け、「X=nu munu」で発話してもらうと、このような揺れは見られず、例外なく 3 拍目で落ちる音調で実現する。つまり、(15)、(16) に助詞が低く付いたパターンである。先に例外的な音調が見られたものに、下線を引いて示す。

(19) LHLL として実現するもの

A 類: ju[da]inu, tsu[gu]sinu, ku[ga]ninu

B 類: u[mu]tinu, ku[ju]mnu, ma[fu]ranu, na[ma]sinu, ju[na]kanu, ja[ma]tunu, a[si]mnu

C 類: u[ku]manu, ka[ta]nanu, na[sa]kinu, pi[ti]tsinu, ga[ra]sanu, ja[ra]binu, ga[dza]mnu

(20) HHLL として実現するもの

A 類: [kiv]sinu, [koo]dzinu, [mii]tsinu, [mm]tsinu, [jaa]tsinu, [juu]tsinu, [aa]inu

B 類: [kaa]mnu, [taa]ranu, [nan]kanu, [uu]dzanu, [av]vanu, [ii]kjanu, [kai]nanu, [kuv]vanu

C 類: [kaa]ranu, [ssa]mnu, [soo]kinu

不明：[waa]dzinu

一方で、2 拍の助詞をつけた場合には、再び語頭から 3 拍分の H が続く例外的な音調が見られる。次のデータは、X=mai niin で発話してもらった X=mai の部分の音調を示している。

(21) LHLLL として実現するもの

A 類：ju[da]imai, tsu[gu]simai, ku[ga]nimai

B 類：u[mu]timai, ku[ju]mmmai, ma[fu]ramai, na[ma]simai, ju[na]kamai,
ja[ma]tumai, a[si]mmai

C 類：u[ku]mamai, ka[ta]namai, na[sa]kimai, pi[ti]tsimai, ga[ra]samai,
ja[ra]bimai, ga[dza]mmai

(22) HHLLL として実現するもの

A 類：[kiv]simai, [koo]dzimai, [mii]tsimai, [mm]tsimai, [jaa]tsimai,
[juu]tsimai, [aa]imai

B 類：[kaa]mmai, [taa]ramai, [nan]kamai, [uu]dzamai, [ii]kjamai, [kai]namai

C 類：[kaa]ramai, [ssa]mmai, [soo]kimai

不明：[waa]dzimai

(23) HHHLL としてしか実現しないもの

[avva]mai (B 類), [kuvva]mai (B 類)

(21) は (19) に、(22) は (20) にそれぞれ対応する音調 (H の実現する位置が同じ) だが、=mai をつけた場合には、(23) のように、(17) で見たような音調も見られる。ただし、文節末まで H が続くことはなく、助詞=mai は低く付く。

この HHH として実現する音調の有無は、一見、後続する音調との関係から説明ができそうである。X=nu munu の場合も、X=mai niin の場合も、当該の文節の後に続く munu や niin が高く始まっている。その高い拍の前に 2 拍分の低い音調があるのが安定した発話だとすると、(24-a-ii) のような音調は許容されない。

(24) a. X=nu munu

(i) [kiv]sinu [mu]nu / [kuv]vanu [mu]nu / [jaa]tsinu [mu]nu

(ii) *[kivsi]nu [mu]nu /*[kuvva]nu [mu]nu /*[jaatsi]nu [mu]nu

b. X=mai niin

(i) [kiv]simai [niin] / [kuv]vamai [niin] / [jaa]tsimai [niin]

(ii) [kivsi]mai [niin] / [kuvva]mai [niin] / [jaasi]mai [niin]

一方、=mai が後続する場合は、(24-b-ii) のように H が 3 拍続いても niin の前に 2 拍分を下げるのが可能である。ただし、このような説明は、異なる音調領域からの影響を考えなければならなくなるため、問題が残る⁽⁹⁾。

3.2.3 4 拍名詞

4 拍名詞には B 類のサンプルが少ないが、どの類でも 3 拍名詞に 1 拍の助詞が付いた場合の音調で実現し、アクセントによる区別はない⁽¹⁰⁾。

(25) LHLL で実現するもの

A 類: fu[ta]atsi, a[ka]ai, tsi[ki]munu, ka[ra]pai

B 類: bi[ki]dum

C 類: u[tsi]dzara, ju[sa]rabi, ka[na]mai, na[bja]ara, ma[ku]gan, si[tu]muti,
a[kja]ada

(26) HLLL で実現するもの

A 類: [pam]mai, [sam]sin,

B 類: [nai]munu

C 類: [ssu]gii, [am]dii, [dzoo]vtsi, [min]gami, [nam]tsitsi, [mna]tsitsi,
[pai]tsitsi

(27) HHHL で実現するもの

[karapa]i (A 類), [panatsi]i (A 類), [nabjaa]ra (C 類), [minga]mi (C 類)

4 拍名詞に 1 拍もしくは 2 拍の助詞が続いた場合には、上の音調に助詞が低く付く形で実現する。X=mai niin の X=mai の実現を示す。

(28) LHLLLL で実現するもの

A 類: fu[ta]atsimai, a[ka]aimai, tsi[ki]munumai, ka[ra]paimai, pa[na]tsiimai

B 類: bi[ki]dummai

C 類: u[tsi]dzaramai, ju[sa]rabimai, ka[na]mimai, na[bja]aramai,
ma[ku]ganmai, si[tu]mutimai, a[kja]adamai

(29) HLLLLL で実現するもの

A 類: [pam]mimai, [sam]sinmai,

B 類: [nai]munumai

C 類: [ssu]giimai, [am]diimai, [dzoo]vtsimai, [min]gamimai, [nam]tsitsimai,
[mna]tsitsimai, [pai]tsitsimai

ただし、2 拍目では落ちず 3 拍目で落ちる、以下のような実現も聞かれた。

(30) na[bjaa]ramai (C 類), [mnatsi]tsimai (C 類), a[kjaa]damai (C 類)

これらがどのような要因によるのかは分からないが、2~3 拍目が渡り音の後に長母音が続く音節に例外が見られるなどの特徴があるのも確かである。

3.2.4 文節における音調実現のまとめ

以上、2 拍から 4 拍名詞における音調の実現を見てきた。

伊良部集落方言の音調は、文節を単位とし、アクセントの類に関係なく 2 から 3 拍目にかけて下降が見られることを典型とする。ただし、2 拍名詞の引用形のように、3 拍分の長さが無い場合は 1 から 2 拍目に下降が見られ、また、要因は不明ながら、3 拍目より後に下降が見られることもある。

一方、2 から 3 拍目に下降が見られる場合には、1 から 2 拍目に上昇が見られる場合と見られない場合がある。見られる場合は 1 拍目と 2 拍目がそれぞれ独立の軽音節である場合であり、見られない場合は、1、2 拍目が重音節で 1 つの音節を成す場合である。

このように、伊良部集落方言の音調は、文節内に下降が義務的であり、上昇が随意的であることから、前者が文節を音調句として特徴付けていると言える。

3.3 音調領域のゆれ

伊良部集落方言の音調は文節を単位として実現するが、一部文節を越えて実現する場合がある。3.2.1、3.2.2 節で、2、3 拍名詞の X=nu munu (X=の もの) における X=nu の音調の実現について報告したが、実は munu も含めた音調の実現は 2 拍名詞と 3、4 拍名詞で異なる。語頭の低下が見られる例で示す。

- (31) 2 拍 : bu[tu]numunu, tu[dzi]numunu, fu[sa]numunu
 3 拍 : ju[da]inu[mu]nu, u[mu]tinu[mu]nu, ku[ju]mnu[mu]nu
 4 拍 : a[ka]ainu[mu]nu, ka[ra]painu[mu]nu, ju[sa]rabinu[mu]nu

すなわち、2 拍名詞では munu が低くつき、そこまでを含めて音調領域となるが、3、4 拍名詞では munu は高く始まり、別の音調領域を作っていると見られる。2 拍と 4 拍名詞の想定される音調領域を { } で示して対照すると以下ようになる。

- (32) 2 拍 {bu[tu]numunu} vs 4 拍 {a[ka]ainu}{[mu]nu}

ただし、3 拍名詞の中でも pititsi には次のようなゆれが見られ、この違いが純粹に名詞の拍数によるものか、後続する名詞や文の中での発話を見ることで、調査する必要がある。

- (33) pi[tɪ]tsinumunu vs pi[tɪ]tsinu[mu]nu

いずれにしても、少なくとも属格の場合には文節を越えて音調領域が広がる場合があることを、(31) の 2 拍名詞の例は示している。

以上は文節を越えて音調領域が広がる例だが、逆に、1 つの文節の中に 2 つ H から L への下降が見られることがある。後ろに述語を続けずに X=mai (X も) だけで発話した場合、2 拍名詞では mai も含めて 1 つの音調領域に収まるが、3、4 拍名詞では mai は異なる音調領域になっているように見える。

- (34) 2 拍 : bu[tu]mai, tu[dzi]mai, fu[sa]mai
 3 拍 : ju[da]i[ma]i, u[mu]ti[ma]i, ku[ju]m[ma]i
 4 拍 : a[ka]ai[ma]i, ka[ra]pai[ma]i, ju[sa]rabi[ma]i

想定される音調領域を示すと以下ようになる。

- (35) 2 拍 {bu[tu]mai} vs 4 拍 {a[ka]ai}{[ma]i}

ただし、3、4 拍語も、後ろに述語を続け文の中で発話すると、1 つの音調領域として発話される。

- (36) a[ka]aimai [niin. (蟻もない)

もし、この方言の音調領域が文節であるなら、文単位の発話の方が音調領域を正確に反映しており、語単位でピッチパタンにゆれが見られる (cf. (2)) 原因は文単位で発話されていないためである可能性がある⁽¹¹⁾。追って調査を行いたい。

3.4 リズム交替—伊良部長浜方言との比較

Shimoji (2009) は、伊良部長浜方言の音調の実現を、フット構造における H と L のリズム交替によって説明している。フットとは複数の拍によって構成される音調実現のため

の単位であり、典型的には 2 拍、例外的に 3 拍で 1 フットとなる。ここでは 2 拍で構成されるフットに、どのように H と L の交替が現れるかを例示する。たとえば (37-a) では ko|o|za|bu|ro|o という 6 拍の名詞 (人名) が 2 拍を一単位とする 3 フットに分割され、その音調は最初のフットが H で、後のフットが L で実現することを表している。

(37) a. (koo)_H(zabu)_L(roo)_L HLLLLL

b. (koo)_H(zabu)_L(roo)_H(mai)_L HLLLHLLL 長浜方言
リズム交替は L であるフットが 2 つ続くことは許しても 3 つ続くことは許さないの
(Shimoji 2009: §6)、助詞=mai を後続させると (37-b) のようにフット構造において H と L の交替が現れる。

この説明は、伊良部集落方言の音調に 2 から 3 拍目にかけて H から L への下降が見られるという本稿の観察と矛盾するものではない。なぜなら、リズム交替による説明でも、2 拍目と 3 拍目の間にフットの境界があり、そのあとは、音調領域が 7 拍までなら L が続くからである。よって、リズム交替が当方言に見られるかは、8 拍以上の音調領域について観察しなければならない。

8 拍以上の音調領域については、まだ詳しく調査できていない部分があるが、次のようなデータは、伊良部集落方言には伊良部長浜方言に見られるようなリズム交替が見られないことを示唆していると思われる。それぞれに想定されるフットとともに、音調実現を H と L で示す。

(38) a. [bantsiki]roo[ma]i (HH)(HH)(LL)(HL)

b. [bantsiki]roomai [niin. (HH)(HH)(LL)(LL) (HHH)

c. [koo]sjanguu[ma]i (HH)(LL)(LL)(HL)

d. [koo]sjanguumai [niin. (HH)(LL)(LL)(LL) (HHH)

いずれも 6 拍の語 (bantsikiroo[グアバ], koosjanguu[拳骨]) に助詞=mai が後続した形で、リズム交替が起これば 3 フット目で (HH) が現れるはずだが実際には現れていない⁽¹²⁾。koosjanguu の文節のみの発話では mai が HL で実現し、文の発話では L が音調領域の最後まで延びる点で、前節までに見た 3、4 拍名詞の実現と変わらない音調をしている。

ただし、現在のところ、伊良部集落方言にフットによる H と L のリズム交替が全く見られない、と言うこともできない。一見、このリズム交替と見られそうな音調実現に次のようなものがある。

(39) a. [koo]sjan[gu]u (HH)(LL)(HL)

b. a[mi]fui[bam]mai[ma]i (LH)(LL)(HH)(LL)(HL)

c. a[mi]fui[bam]maimai [niin (LH)(LL)(HH)(LL)(LL) (HHH)

(38-c) を引用形で発話した場合、(39-a) のように最後の 2 拍が HL で実現し、一見 H と L が一語の中で交替しているように見えるが、その交替はフット単位のものではない。(39-b)(39-c) では、リズム交替が予測するフット単位での H と L の交替が見られる。ただし、この例は、amifui (雨降り) と pammai (食糧) のそれぞれの音調が現れているとも見ることができる。つまり、(40-a) のようにそれぞれを音調領域とすると、結果的に H と L の交替がフット単位で現れるのである。

(40) a. {a[mi]fui} {[bam]mimai} {[niin].

b. {a[mi]furasi} {pa[na]mai} {[niin].

これを一部支持するものとして、amifurasipana（野朝顔）の例が挙げられる。これも H と L が交替しているように見えるが、その音調は (40-b) のように、amifurasi（雨降らす）と pana（花）に分けて考えた方が説明が付きやすい⁽¹³⁾。伊良郡集落方言にフット単位によるリズム交替が見られるかは、より慎重に調べなければならない。

3.5 文における音調の実現

文における音調の実現について、いくつかのサンプルを見ておく。包括的な記述は難しいが、いくつかの例から、これまで見た音調が文においても現れることを確認する。

図 1 は、「明日も日本の温泉に行こう」という文の発話である。1 行目にモーラごとの区切り、2 行目に音調領域とモーラごとのピッチ、3 行目に意味を示した。なお、分析には praat (version 6.0.54) を用いている。

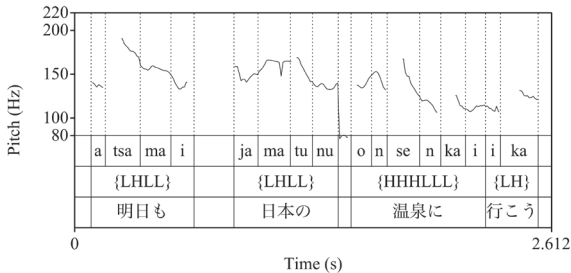


図 1 明日も日本の温泉に行こう。

これを見ると、1、2 文節ではどちらも低く始まり、2 拍目で上昇した後、3 拍目にかけてピッチが下降するという、これまで見てきた標準的な音調である。3 文節目の onsen は日本語からの借用だが、1 拍目と 2 拍目が 1 音節をなし、高く始まっている。ただし、その H は 3 拍目まで続く (27) でみた音調で実現している。下降した L はいずれも文節末まで続いている。述語の ika では文末にかけて大きく上昇が見られる。文末の上昇は、疑問文（質問）を除き、一般的に見られる音調である。

図 2 は「どこの部屋で寝た？」という疑問文の音調である。

この例でも、文節の初頭は低く始まり、2 拍目に高くなって 3 拍目にかけて下降が見られる。ただし、2 文節目は文節末で大きく上昇している。焦点を表す係助詞（ここでは =ga）がある場合には、このように上昇が見られることが多い。この文は疑問文であるため、文末に下降が見られる。この最後の文節は、1 拍目と 2 拍目が 1 つの音節を成すために高く始まるため、下降はこの文末のものしか見られない。

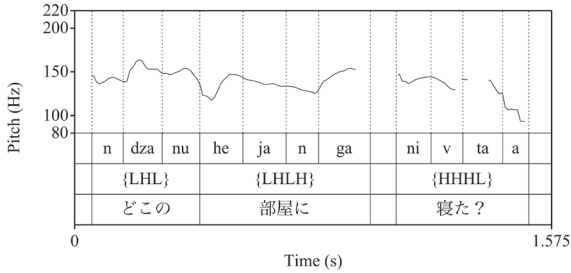


図2 どこの部屋で寝た？

図3は「南の部屋で寝た。」という意味の文で、図2の質問に対する答えとなる文のものである。

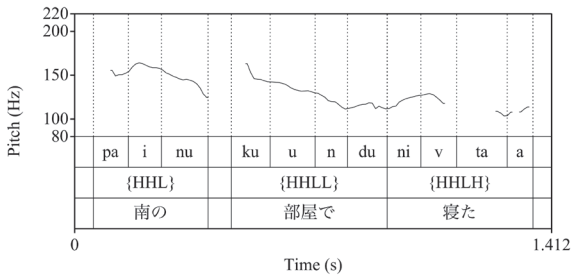


図3 南の部屋で寝た。

1文節目は重音節のため高く始まり3拍目で落ちている。2文節目も同様。係助詞=duの位置で若干の上昇が見られるが、=gaほどではないためこはLで解釈した。3文節目の述語は重音節のため高く始まり、taで一旦落ちた後、文末にかけ上昇している。

図4は図3を可否疑問に変えて発話してもらったものである。2文節目の係助詞が=duではなく、=nu(可否疑問の係助詞)に変わっていることに注意されたい。

ほぼ図3と同じ音調だが、文末にかけて下降が見られることに注意されたい。この下降は図2でも見たように質問の疑問文には義務的である。ただし、その下がり方は図2と異なり、2拍目から徐々に下降が見られたため、暫定的にHMMLと表記した。下降の仕方の違いが何を意味するのかはよく分からない。

最後に図5として「漬物からも毒が出てきた。」の例を挙げた。

この例で注目したいのは、「漬物からも」に当たる文節に、2つのHからLへの下がり目が見られることである。ここでは、この文節が名詞と助詞(連続)の部分でそれぞれ別の

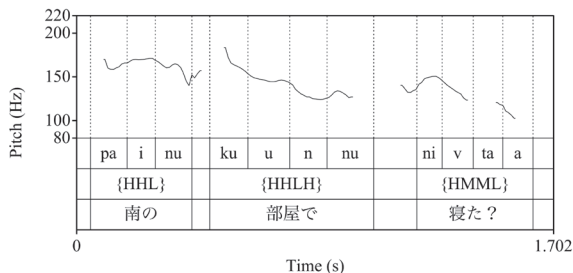


図4 南の部屋で寝た？

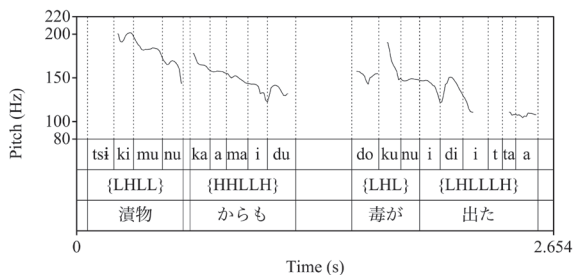


図5 漬物からも毒が出た。

音調領域になるために、2つの下降が見られると解釈した。一方、これを1つの音調領域と見れば、フットによるリズム交替が起きている、という解釈も可能である。ただし、図6のように=kaa(から)からの高ピッチがさほど目立たず、1つの音調領域のように見える発話も可能なようであり、この音調領域のゆれ、もしくはリズム交替の可能性については、より慎重な検討が必要である。

以上、いくつかのサンプルを見てきたが、いずれも音調領域の2拍目から3拍目にかけて下がり目が見られ、この抑揚によって、音調句の形成を示していると見ることができる。

4. まとめと課題

本稿では伊良部集落方言の音調について観察し、伊良部集落方言には文節内に必ず下降が見られること、またこの下降はアクセントの類に関係なく、2から3拍目にかけて見られるのが典型であることを見た。加えて、音調領域のゆれやリズム交替の有無についても検討し、最後に文における音調実現のサンプルをいくつか示した。

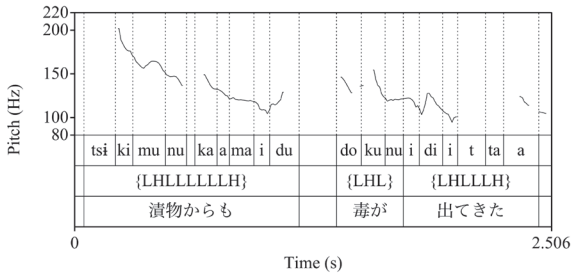


図6 漬物からも毒が出てきた。

残された課題は多いが、とりわけ以下のような点については、今後、詳しい調査が必要である。まず、文節における音調に関しては、名詞とそれについて助詞を中心にデータを示したが、動詞や形容詞を中心とする用言複合体の音調については記述できなかった⁽¹⁴⁾。また、音調領域のゆれについては、後続する名詞や文の中での発話などでもさらに検討する必要がある。さらに、リズム交替の存在については長浜方言と違う形で現れる可能性も含めて検討する必要がある。これらの問題も含め、また、情報構造や統語構造の問題も視野に入れて、文における音調の実現を記述する必要がある。そのような記述が可能になって初めて、様々な話者における音調の統一した記述が可能になるものと思われる。

謝辞

調査にご協力いただいた、池間藤夫さんに感謝申し上げます。

注

- (1) なお、方位は自然方位によるものであり、民族方位とは異なる。伊良部集落で使用される民族方位では、島の中央にある丘陵側を「北」と呼び、よって、池間添、前里添は丘陵の反対側にあるため「北区」、丘陵側を見て右手にある伊良部、仲地を「東区」、左手にある佐和田や長浜を「西区」と呼び習わしている。
- (2) 高齢の話者では/g/も/a/に挟まれた場合に有声咽頭～声門摩擦音として現れるが、若い話者では子音が消えて/a/の長母音として実現する。
- (3) この他に/ttaa/ (来た) のようにごく限られた語で/t/がC₁に立つことがあるが、この場合、調音位置が歯茎で閉鎖させる [t] よりもやや前で、前歯と舌で破裂を作るなど、/t/の重子音と解釈してよいか、問題が残る。
- (4) /o/はほぼ長母音でしか用いられない。短母音の/o/は、文末に来る/u/の異音として現れるくらいである。
- (5) ただし、フットとの関係については3.4節を参照。

- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』 沖縄タイムス社.
- 永野マドセン泰子 (2013) 「南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション」『琉球の方言』 37: 25-43.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』 明治書院.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (編) 『日本語研究の 12 章』, 490-503 頁, 明治書院.
- 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み—その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件—」『言語研究』 150: 59-85.
- Shimoji, Michinori (2009) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. 『言語研究』 135: 85-122.